

# 島崎藤村『ある女の生涯』論

おげんの生涯の意義

細川正義

一

『ある女の生涯』の主人公小山おげんのモデルである高瀬そのが根岸の精神病院で六五歳の生涯を終えたのが大正九年三月三十一日、病因は西丸四方の『島崎藤村の秘密』によれば、「梅毒性の精神病」ではなく、「幻覚妄想性のもの」で、「幻覚妄想性精神分裂症」で亡くなった父正樹と同じものであった<sup>(1)</sup>。藤村がもつとも敬愛してきた姉そのの死が、深い悲しみをもたらせたのは言うまでもないところだが、『ある女の生涯』に先立って、姉の没後間もなくの六月一日発行の雑誌「解放」に発表された短編『涙』にその哀惜と鎮魂の思いがよくあらわされていることはつとに知られているところである。

『涙』は、主人公の御隠居が「わたしも斯うして、娘と二人きりで暮せる迄には、容易ぢや無かつた」と感慨を漏らすように、夫に死別してから、苦勞を重ねて、今はようやくやく東京の片隅に庭のある小さな家を構え、郷里からの仕送りを得て、一人の奉公人と共に平穩な余生を送っている風景が語られた物語である。『涙』の御隠居のこの生活は、『ある女の生涯』のおげんが長い間望んでついに得られなかつた境遇であるのだが、瓜生清氏が当時の、そのの

夫高瀬薫が郷里及び養子の高瀬兼喜に宛てた書簡から状況を推察して、『涙』が藤村による仮構の世界であることを明らかにされているように<sup>②</sup>、大正五年九月に上京し、ただちに小石川の保養施設に入院した後、六年二月には「病勢」が改まって、保養施設での治療を断られたので、根岸の精神病院に転院を余儀なくされ、以後亡くなるまで退院することがなかったという経緯において、その晩年に御隠居のような穏やかな老境の生活は最後まで訪れなかったことが推察できる。『涙』では御隠居は郷里から仕送りを受けて生活しているが、経済的な心配をしないで、「庭の草花の手入をしたり、お嬢さんに手伝はせたりして、年老いた寡婦らしい余生を送らうとして」いる御隠居の生活は、『ある女の生涯』のおげんが上京して弟たちに、「どんな小さな家でもいいから」と強く要求して、結局得られることなかった「隠れ家」での生活であり、そのような安穩な生活の中に御隠居をおいた『涙』が、藤村が不幸な姉の生涯を悲しみ、哀惜の情を持って葬ろうとする心情を託した作品であることがよく窺えよう。

わたしも斯うして、娘と二人ざりで暮らせる迄には、容易ぢや無かつた。なか〜。こなひだ弟の家を訪ねてやつた時に、近頃はわたしも朝寝をするやうに成つたよつて、そんな話が出たといふものサ。(略)どうして以前はこれで朝寝をするどころか、早く眼が覚めて困つたくらゐだぞよ。わたしはもう暗いうちから起きて、自分の部屋を掃除したり、障子をバタ〜と言はせたり、それをしなければ気が済まなかつた。(略)そのわたしが、此節ぢや、朝寝をして居られるやうに成つた。以前のやうに眼は早く覚める。それでも静かにして寝て居られる。寢床の中で眼を覚まして、朝早く鶏の啼くのを聞いて居ると、何とも言へない冴え〜した気持になる

以前とは大違い。なか〜斯様な気持に成れようとは、自分でも思はずか。

奉公人のやすじに向かつて言つた、この言葉には特に精神的にも、生活の上でもよやく清謐で穏やかな晩年を過ごすことができるようになった御隠居の心情がよくあらわされています。そして更に、女としての苦勞を重ねてきて四十近い年になつて御隠居の家に奉公するよつになり、それまで夫に苦勞して、猜疑と否定の多い不遇の人生を過こし

てきたやすじが次第に癒され、「御隠居さんの言ふことなら、何でもしたがった」という状態にまでなっていたある日、この御隠居の話聞いた後、

やすじは台所の障子をあけて、日頃流許で働く時のなぐさみにする石垣を見に行つた。もう何年といふことな  
く溜りに溜つて居たやうな涙が復た彼女の朴訥な顔を流れてきた。

と書かれてるように、それまでの苦勞の一切を流しさるかのようなたたかい涙を流す結末部分は、不幸なやすじをも安穩に導く御隠居の穏やかな晩年が彷彿され、そこには藤村の、姉そのの生涯に対する深い同情と癒しの心情を重ねて読むことが十分可能であるう。『ある女の生涯』に対して、和田謹吾が、

おげんはその「隠れ家」さえ求めることができなかつた。というより、当時の藤村は園子にそれを与えてやること  
ができなかつた。できたのは「深い窓」のある、おげんが「こゝはもう自分に取つての座敷だ。それを意識  
することは堪へがたかつた。」という精神病院へ入れてしまうことであつた。おげんはそこで三年ほど暮ら  
して、見取る人もなく死んでいく。この死は藤村に取つて堪へがたい呵責となつたに違いない。

と指摘している<sup>③</sup>姉の死に臨んでの「堪へがたい呵責」の心情や、三好行雄が

藤村にとつて彼女の死を描くことは、宿業の浄化を確信するために必要なひとつの秘儀であつたはずである。

と指摘した<sup>④</sup>家と血にまつわる「宿業の浄化」といったものを藤村が姉の死への鎮魂の思いの中で付加しようとした  
視点を見るならば、この、死の直後に書いた『涙』こそ、そうした藤村の思いが切実に託された作品であるとい  
うことができよう。

しかし一方、瓜生清氏が

しかし、美しく仮構された老年の世界に姉を昇華させる試みは、逆に実際の姉の凄惨な最後を作者の意識内に強  
くきわだたせることになるのも、ごく自然な成り行きであるう。

と述べているように<sup>(5)</sup>、現実には藤村は大正七年五月から『新生』の発表を開始しており、兄広助とも義絶して逼塞した生活を過ごすもつとも困難な時に遭遇していた故、『家』の小泉三吉と姉お種の関係に描いたような深い親愛と共感を抱いていた姉に対して、病院を手配してからはほとんど手を差し伸べることの出来なかつたまま死に至らしめた悔恨を、鎮魂の涙を注いだ作品を表したからといって、すべてを解消し得るはずもないわけで、深い悲しみと断念の中で寂しく死に至らしめたその不幸な生涯は、『涙』を執筆することで更に一層悔恨の思いを引き出すことになり、深刻に藤村の心奥をとらえていたに違いない。

## 註

- (1) 西丸四方『島崎藤村の秘密』昭和四一年六月、有信堂、三二頁。
- (2) 瓜生清『島崎藤村、ある女の生涯』論、福岡教育大学紀要、第四三号第1分冊、平成六年二月。
- (3) 和田謹吾『ある女の生涯 宿業の終焉』、『国文学』昭和四六年四月、学燈社、一三四頁。
- (4) 三好行雄『島崎藤村論』昭和四一年四月、至文堂、三八二頁。
- (5) 瓜生清、前掲書、三八頁。

## 二

藤村は昭和一三年一月の『小説集』春待つ宿』付記』において、『ある女の生涯』の執筆を振り返って次のように記している。

三度までも同じ人物を自分の作中に取り扱ったことになる。これは写しても写しても尽せないやうなものがその人の生涯からにじむやうに出て来てゐるためであつた。わたしが女の一生といふものを考へるやうになつたの

も、さついふ声を呑んでこの世を歩いて行つたやうな人が自分の最も親しい身内のものにあつたからで。

「二度まで」とは、『家』と『ある女の生涯』『夜明け前』を指す。『夜明け前』を書いた後のこの感慨は、また『ある女の生涯』執筆での心情をも窺うことができよう。即ち「写しても写しても尽せないやうなものがその人の生涯からにじむやうに出て来てゐる」という認識には、『涙』で盛り込んだ 鎮魂の涙 にとどまらず、安政三（一八五六）年に生まれて六五歳で生涯を閉じるまで、父正樹の側で、明治維新の激変を体験し、近代の急速な変化に翻弄され破れていった夫高瀬薫の妻として苦勞と忍従することの多かつた、そして最後は、『ある女の生涯』に、

親戚の人達は飾り一つ無いやうな病院風の部屋に火鉢を囲んで、おげんの亡き骸の仮に置いてある側で、三月の深夜らしい時を送つた。おげんが遺した物と云つても、旅人のやうに極少なかつた。養子はそれを始末しながら、『やう』それでも、こんなところに辛抱したしたものだ』と言つた。

と記されたおげんの終焉の様子のごとく、製菓業を営み伝統ある旧家を守つて来たにもかかわらず、形あるものは何も残さないで世を去つた姉の生涯に深いまなざしを注ぎ、その意味を確認しようとする強い意志を認めることができよう。そしてそのことは、ほぼ同時にかかれた「北村透谷二十七回忌」（『大観』大正十年七月）において、

・長い年月の間にあの友人のことを考へて見ると、掘つても掘つても尽きないやうな種々なものが後から〜と出てくるやうに思はれた。

・その惨憺とした戦ひの跡には拾つても〜尽きないやうな光つた形見が残つた。

と透谷を振り返つた藤村の認識にも通じると考えられる。換言すれば、『ある女の生涯』は、高瀬そのの生涯に対して、時間の流れにおいては符合した形で展開しているが、作品はそのの生涯に対して、透谷について記したと同じような意義を認める作者が、あらためてそのの生涯を凝視して、その生涯の意義を確認しようとする意図によつて創作した仮構世界であると言ひ得よう。

では、その、その生涯を問い直そうとする作者のまなざしが『ある女の生涯』のおげんを通して何を求めようとしていたのか、そのことを窺う中で見逃せないのが、父のかかりであろう。

その点において注目されるのが、おげんが「ずっと以前に一度」入院したことのある「根岸の精神病院」へ再び入院させられた後、「俺はこんなところへ来るやうな病人とは違ふぞい。どうして俺をこんなところへ入れたか」と心の中で自問し、「みんなで寄つてたかつて俺を狂人に」したと周囲を批判する一方で、嘆息しつつも「逃れられない境遇であることを認識し始めていく中で、改めて父のことを想起して独り呟く次の箇所である。

『お父さま　お前さまの心持はこの俺にはよく解るぞなし。俺もお前さまの娘だ。お前さまに幼少な時分から教へられたことを忘れないばかりに　俺もこんなところへ来た。』

おげんは「姉弟中で一番父親に似て居るとも言はれ」てきた。そのことに誇りと自負を抱く彼女はまた、

『俺は歌は読まん。そのかはり若い時分からお父さんの側で、毎日のやうにいろ／＼なことを教はつた。聞いて見ろや、何でも俺は言つて見せるに　何でも知つてるに　』

と熊吉に向かつて強調するほど、父を尊敬し、生きざまを手本にして過ごしてきた。例えば次の「御霊」についてもそうである。

おげんは自分を笑ふやうにして、両手を膝の上に置きながらホツと二つ息を吐いた。おげんの話にはよく『御霊さま』が出た。これはおげんがまだ若い娘の頃に、国学や神道に熱心な父親からの感化であつた。

その他、おげんが『御霊さま』を意識する次のような箇所もある。

『御霊さま』はまだ自分等と一緒に居て下さるとおげんが思つたのは、旦那にお新を逢はせることの出来た時だつた。

『御霊さまが居て、この年寄を守つて居て下さるよ。そんな昏の思ふやつなものとは違ふよ。たいもない。御霊

さまはお新といふ娘をも守つて居て下さる。(略)』

こうした父から感化を受けた『御霊さま』に対する信心の篤さに、父の教え、考え方を忠実に守つてきた典型を窺うことができる。そしてそのような父の教えに忠実なおげんの生き方は、瓜生清氏が、

おげんに潜在している性への違和は、父の教育によつて一方的に注入された婦徳の觀念に力を吹き込み、貞操の権化のような女に仕上げさせることになつたのである。

と指摘されているように<sup>(1)</sup>、夫に対してどこまでも貞操を守り通していくおげんの考え方にも通じて居よう。

言い換えれば、おげんの生涯は「お父さんの側で、毎日のやうにいる」なことを教はつた」ことを実践し通してきた人生であつたともいうことができる。その点については、佐藤泰正氏が、

『新生』でひらかれた 父 の世界へ、いまおげんの眼を通して作者はさらに一步踏み降つてゆく。いや、夜明けを待ちつつ、「根岸の空はまだ暗かつた」と結ぶ結末こそは、これをいまひとつの 夜明け前 と呼ぶこともできよう。ある女 の生涯を語つて、その「深い眠り」からの夜明けはいつかと作者は問いたげである。

と述べられたように<sup>(2)</sup>、新時代 明治 に夢を抱きながら、夢が瓦解し、狂熱のうちに不遇の死を遂げた父正樹の人生を、その正樹が夢を抱いた 明治 を懸命に生きたおげんの生涯を描く中で相対化し、反芻しようとする作者の意図によつて眺め直した『ある女の生涯』の成果が、やがて『夜明け前』につながっていくという佐藤氏の視点は、この作品の意義のひとつとして重要であらう。

そして、その視点でもう一度「幼少な時分から教へられたことを忘れないばかりに 俺もこんなところへ来た」の箇所を振り返つてみると、更に重要な問いが窺えることになる。即ち「こんなところへ来た」は、精神病院を指していると同時に、父を道標にして生き通してきた人生が、結局は徒勞の人生であつたことを痛恨している言葉でもあるのである。息子の娘が居た頃を回想した時に「俺はツマらんよ」と、娘に対して呟くところがあるが、『ある女

の生涯』に描かれたおげんの生涯はまさにこの「俺はツマらんよ」という徒勞に帰した人生を痛恨する心情に覆われた生涯であつたということができよう。

三年間の空白の後、親戚の者誰一人にも見取られることなく病死したおげんの寂寥は、哀切であると同時に、作者の深い同情が注ぎ込まれていることを感じさせる結末部分でもある。例えば、年取つた看護婦がおげんの両手を胸の上に組み合わせてやつた行為を書き加えたところに、おげんを通して姉の死を想起する作者の深い同情と鎮魂の思いが託されていることを読み取ることができよう。

ただし、おげんは確かに父の教えを実行し通して孤死に至つたが、このおげんが、父を振り返る時、狂熱の中で死んだ父とはつきり距離を置いて眺める立場を取つている点は見逃せないところである。即ち、「教へられたことを忘れない」という捉え方には、父の生涯に対して「意識的」な姿が窺える点であるが、更に父の狂気と座敷牢を想起する箇所はその意識が更に顕著に窺える。

## 註

- (1) 瓜生 清、前掲書、四一頁。  
(2) 佐藤泰正『ある女の生涯』『春』と『夜明け前』のはざまに「」、『解釈と鑑賞』平成十一年四月、至文堂、一〇五頁。

## 三

おげんは小山の家の方から、発狂した父を見舞ひに行つたことがある。父は座敷牢に入つて居ても、何か書いて見たいと言つて、紙と筆を取寄せて、そんなに成つても物を書くことを忘れなかつた。『おげん、こゝへ来さつせれ、一寸こゝへ来さつせれ』と父がしきりに手招きするから、何か書いたものでも見せるのかと思つて、行く



と、父は恐ろしい力でおげんを捉へようとして、もつすこしでおげんの手が引きちぎられるところであつた。父は髭の延びた蒼ざめた顔付きで、時には『あはは、あはは』笑つて、もうさんぐ腹を抱へて反りかへるやうにして、笑つて笑ひ抜いたかと思ふと、今度は暗い座敷牢の格子に取りすがりながら、さめぐと泣いた。

おげんが「小山の家」で過ごしていたところに発狂した父を見舞つた時の記憶であるが、自ら精神病院に幽閉の身となつてあらためて想起した心情の中には、座敷牢に晩年を過ごした父への深い同情と、狂気に対する恐れが明確に窺えるところである。そして父の狂気への恐れを鮮やかに想起する心情はまた、確かな父の子の証しとして受け継いだ自らの狂気への恐れともなつておげんに強く意識されていたことが窺える。

自らの中の狂気を自覚した時、まず意識されたのは、父が晩年を孤独と狂熱の中で過ごした「座敷牢」のことであり、「格子に取りすがりながら、さめぐと泣いた」父の悔恨の人生であつた。そして自らも父の「座敷牢」に等しい精神病院に幽閉された身であることを眺め直した時、それまで払拭できない恐れとして彼女を威圧してきた父の狂気は、その狂気に陥つた者の無念と寂寥の思いへの共感として、再びおげんを懐かしい父へいざなつていった。即ち、おげんの人生は、父を道標として歩むと同時に、父の狂気に対する恐れを先立てたものでもあつた。そのことを窺わせるのが次の箇所である。

晩年を暗い座敷牢の中に送つた父親のことがしきりとおげんの胸に浮んで来た。父の最後を思ふ度におげんは何処までも気を確かに持たねば成らないと考へた。どうかしてあの父のやうには成つて行きたくないと考へた。それには成るべく父のことに触らないやうに。同じ思出すにしても、父の死際のことには触らないやうに。これはもう長い年月の間、おげんが人知れず努めて来たことであつた。

「何処までも気を確かに持たねば成らない」「成るべく父のことに触らない」という箇所には、おげんがいかに父のことを意識的にとらえ、特に晩年の父に対して明確に距離を置いた生き方を思考していたかが理解できる。おげんは、

父を敬慕し、人生の師とも仰いで教えを忠実に守ろうとして来たが、一方、狂気に浸食され、「座敷牢」に幽閉の身になることだけは絶対に避けようと思ひつゝ、「人知れず努めて来た」のである。それはまさに、藤村が透谷の生き方に学ぶ姿勢、即ち、狂熱の中で自ら死を選んだ透谷の生き方から生肯定の方向に転じて、透谷の「掘つても掘つても尽きないやうな」「光つた形見」を学び取つて、自らの人生の生き方としていこうとする姿勢である。

即ち、おげんにおいては、父の人生の「狂と実」のその境を見据えつつ、「狂」を意識的に回避しつつ、「実」の面において人生の指針としていこうとする生き方が指摘できるのである。その点伊狩弘氏が「この小説ではじめて藤村は狂気の内と外という狂気を捉える型を見出したと言いえよう。」と指摘されているが<sup>①</sup>、おげんの人生は、まさに父の狂気に対する外的現象と内的真実とを見極めた認識に立ったものであることが窺えるところである。換言すれば、おげんは父に深い同情を寄せつつ、その「狂」に転じる境目を見極めて、内側の真に学ぼうとしてきたといえるのである。

しかし、この視点で言うならば、父の「狂と実」の境目を認識するおげんはまた「狂と実」のはざまで苛まれていく存在であるということも見逃せない点である。例えば、瓜生清氏が次のように指摘されている。

「お父さま　お前さまの心持ちは、この俺にはよく解るぞなし。」と言つて、おげんが父の運命との一体化を確認する場面など、おげんに継起する妄想・幻覚状態においても、正確な認知能力が保たれている瞬間がある描き方になつてゐることを忘れてはなるまい<sup>②</sup>。

おげんは「狂」に苛まれていつた父の轍を踏まないことを人生の指針として懸命に生きてきた。その父の「狂」の側に引き込まれるのを懸命に踏みとどまろうとする意識は、一方時間の経過と共に確実におげんの精神を蝕んでくる自らの「狂」とのせめぎ合いの中で、あくまでも父と自分を差異化しようとする意識が働く。瓜生氏が「正確な認知能力が保たれている瞬間」と指摘される場所であるが、おそらく藤村は、おげんが「狂と実」のはざまで、時折「正

確な認知能力」をみせつつ次第に狂気の中に陥っていく姿に、人間の「狂と実」の限界を捉えようとしたのではないかとということが推測できる。

更に見逃せないのが、そのように絶対に避けようと懸命に守ってきたにもかかわらず、父と同じ症状に捕らわれていったおげんについて次のように描かれている点である。

小石川の高台にある養生園が斯うしたおげんを待つて居た。最後の『隠れ家』を求めるともりで国を出て来たおげんはその養生園の一室に、白い制服を着た看護婦などの廊下を往来する音の聞こえるところに、年老いた自分を見つめるさへ夢のやうであつた。(略)あのお新を相手に臥たり起きたりした小山の家の奥座敷に比べると、そこで見る窓はもつと深かつた。

養生園に移つてからのおげんは毎晩薬を飲んで寝る度に不思議な夢を辿るやうに成つた。

弟熊吉によつて養生園に有無を言わず入園させられたおげんは、次第に現実から遊離して「不思議な夢を辿るやうに成つ」ていった。肉親の中で最も頼みとして来た熊吉が、おげんの外的な症状のみを判断して「一方的に養生園に入れた時に、おそらくおげんが懸命に守り通して来たものはそこで切れたといえる。親戚のものに迷惑をかけ、次第に孤立していく姉の現状を憂慮した熊吉の処置は間違っていないし、「狂」への兆候の不安を潜めながらも弟たちに『隠れ家』を求め続けて来たおげんの懸命の訴えも真実である。そのおげんの内面の誠が看過され、身体的兆候のみで人生の戦いの場から切り離されていったおげんの生涯を描くことにこの作品の意義があると同時にそこに、作者藤村の姉そのの死に深い哀感と悔恨の情を注ごうとする真の心が窺えるのである。

註

- (1) 伊狩 弘「ある女の生涯」論(『日本文芸論稿』第一八、一九合併号、東北大学、平成三年一月、二八頁)。

(2) 瓜生 清 前掲書 四三頁。

#### 四

父の教えを懸命に守つて生きて来たおげんが、その父を想起する時、常に記憶の底から浮かび上がらせていたのが、父の晩年の狂気への恐れであつた。にもかかわらず、同じ病に陥り、父の「座敷牢」に等しい精神病院で、親類縁者の誰一人にも看取られず寂しく死んだおげんの生涯、その生涯に対し、最愛の姉の死を悼み悔恨する藤村が、それ故にいかなる意義を盛り込んで描こうとしたのか、そのことを明らかにする必要がある。手がかりとして次の箇所が注目される。

『お父さんが亡くなつてから、お母さんは一度も鏡を見ない。(略)』

おげんは親しげに自分のことを娘に言つて見せて、お新がそこへ持つて来た鏡に向はうとした。ふと、死別してから何十年になるかと思はれるやうなおげんの父親のことが彼女の胸に來た。おげんの手はかすかに震へて來た。彼女の父親は晩年を暗い座敷牢に送つた人であつたから。

『ふーん。』

思はずおげんは唸るやうな声を出して自分の姿に見入つた。彼女が心ひそかに映ることを恐れたやうな父親の面影のかはりに、信じ難いほど変り果てた彼女自身がその鏡の中にいた。(略)

「お父さんが亡くなつてから」「一度も鏡を見ない」とは、いかにおげんが夫の愛のみを支えにして生きてきたかを窺わせる。そうしたおげんの生き方は、父としては子を傷け、夫としては妻を傷けて行つたやうなあの放蕩な旦那が、どうしてこんなに恋しいかと思はれる」といった箇所にも繰り返される。注目されるのは、その夫の死以後はじめて

鏡を見たおげんが、そこでは夫ではなく父を想起している点である。しかも、「彼女が心ひそかに映ることを恐れたやうな父親の面影」を浮かべつつ一方で「信じ難いほど変り果てた彼女自身」を「鏡の中」にみたと続けていることである。そこには明らかに、父の教えの通り、夫の愛のみを守り支えとして生きてきたにもかかわらず、夫との愛はうまく行かず、結果として、苦勞ばかりの多い人生であつたという痛恨の思いが心奥に浮かんでいることが推測できる。

藤村は『ある女の生涯』執筆の少し前に、時代と女性に対する認識を表した次の文章を発表している。

・明治の維新とは言つても根深い過去のを全く新しくすることはできなかった。ある意味から言へば私達の眼前にある多くのものは封建時代の遺物の近代化に過ぎなかつた。欧羅巴の大戦の影響を受けて、漸くそれらの過去のものの壊れ行く時が来たのかも知れない。 「胸を開け」(東京朝日新聞) 大正九年一月一日

・婦人の眠りの深かつたといふことを私は一概に旧い囚はれた思想とか、長いこと置かれた奴隷のやうな状態とか、屈從を強ひようとする男子の偏見とかにのみ帰したくない。むしろ私は女性自身の内部に 本能と性欲と支配され易く見える女性自身の内部に、その深い眠りの源のあることを想像する。

「明治維新」では「過去のもの」を全く新しくすることはできなかったが、世界大戦を経て日本においてもようやく「封建時代の遺物」が壊れ行く時が来た。おげんの生涯とかかわらせて考えるなら、旧い封建的な「家」の考え方が崩れ、個の自由開放が言われるようになってきたということでもあろう。そしてそれは社会の変革としてだけでなく、個々の人間の内部においても改まってきているという感触を得ることがもうひとつの文章から窺える。そしてそうした藤村の認識が、おげんの「家」に対する考え方にも反映されていることが例えば次の箇所からも窺える。

・あの旦那が亡くなつてから、俺はもう小山の家に居る気もなくなつたよ。

・』とつちにしても、あなたのところの養子にも心配させるが好つござんすサ。』

『お前はそんなに暢気なことを言ふが、旦那が亡くなつた時に俺はさう思つた　俺はもう小山に縁故の切れたものだと思つた　』

おげんの嫁いだ小山家は旧家で財産も少なからずある。いかに夫が不始末を繰り返して長く出奔していたとはいえ、夫が亡くなれば養子夫婦に対して絶対的力を持ち得るのは未亡人であるおげんである。その証拠に、おげんの養生園入園以来、小山家の養子は仕送りを続けているのである。即ち、旦那が亡くなつたら小山の家とは縁故も切れるとするのはおげんの考えであり、古い「家」に束縛されず、あるいは「家」の権威にしがみつかず、夫と自分という夫婦としての単位を最優先させた考えこそおげんの考えであり、それはまた、夫に尽くし、夫婦の仲を守ることを教えてきた父の考えでもあつたといえる。

それ故、おげんは夫の死後、何とか努力して「家」を出て　最後の「隠れ屋」を求めようとしてきた。

・「漸く来た」とおげんは独でそれを言つて見た。

・「そこは女だもの。俺は半年も前から思い立つて、漸くここまで来た」と繰り返す言葉はまさにその実感を表していよつ。

しかし、おげんの心の内側の心情が顧みられることなく、外面に現れた現象（病状）の変化のみで即養生園から精神病院へ送り込まれたように、形（権威）としての「家」を捨てたおげんには、現実には、東京での「隠れ家」を与えられるどころか小遣いにすら事欠く状態になる。

彼女は六十の歳になつて浮浪を始めたやうな自己の姿を胸に描かずには居られなかつた。しかし自分の長い結婚生活が結局女の破産に終わつたとは考へたくなかつた。（略）彼女は旦那の忘れ形見ともいふべきお新と共に、どうかしてもつと生甲斐のあることを探したいと心に思つて居た。

父の教えを守り、「彼女の力に出来るだけことは為」て頑張ってきたのだから、何とか「もつと生甲斐のある」人生を見いだしたいと願うおげんには、藤村の「婦人の眼ざめ」に述べられた通りの、個としての自覚と生への意志を汲み取ることが出来るのである。

しかし其の後のおげんは、残された唯一の支えであつたお新からも離れ、孤塞の生涯を終えることになる。関谷由美子氏が、

おげんは過去を破壊したのだが、その破壊は自由や解放や新しい生をもたらす代りに、直ちにおげんを捕われの身としたのである。古い牢獄の出口は、皮肉なことに新しい牢獄の入口だったのである。

と指摘されている<sup>(1)</sup>のは、そうしたおげんの終焉の悲劇のとらえ方としての確である。

作品は「もうそろ／＼夜が明けさうなものですなあ。」という言葉に対して「根岸の空はまだ暗かった。」と転じて終わる。「夜が明けさう」とはおげんの生涯のうえに古い「過去」を破り個の自立、婦人の眼ざめに向けての実践を見ようとした作者の真の癒しの言葉であると共に、「根岸の空はまだ暗かった」は、そのおげんを結局孤独な死に終わらせざるをえなかった「時代」の旧さを痛恨し、おげんの生涯はその堅牢な旧さに敗北した人生ではあつたが、それはやがて必ず来る「夜明け」に対する貴重な犠牲の生涯であつたとする作者の心情が託された言葉であるといひ得よう。

註

(1) 関谷由美子「流浪する狂女と二階の叔父さん 藤村『ある女の生涯』と『出発』」、『文学における性と家族』

佐藤泰正編、笠間書院、所収、一九九九年四月、三二頁。